

第25回

子どもの福祉と児童クラブ

― 学生のSDGs視点から (3) ―

行方市SDGs推進アドバイザー・茨城大学教授 野田 真里

行方市と私の研究室が連携して実施した「行方市SDGsフィールドワーク2022」を通じた、本学学生による考察についてのご紹介です。ご参考になれば幸いです。なお、市民の皆さまに共有させていただいております「学生のSDGs視点から」(1、3)については、私の研究室の学生による原文を尊重しつつ、必要な編集を行っております。

1. 貧困削減に貢献する児童クラブ

SDGsには「誰一人取り残さない」という理念のもと、目標1として「貧困をなくそう」が掲げられている。行方市においても、児童クラブの存在そのものが貧困をなくすことに大きく貢献していると考えられる。児童クラブがあることによって保護者が就労しやすくなる。また、利用料は生活保護を受けている場合や、ひとり親世帯などの市民税非課税世帯の場

合は減免がなされている。

これは踏まえて、児童クラブにおける貧困世帯へのより効果を高めるアプローチとして、学習支援に取り組みことを提言したい(現在は行われていない)。貧困世帯では塾に通わせることや親が勉強を教えることは経済的・時間的に難しいことが考えられる。きょうだいが多ければなおさらだ。あくまでも児童クラブのスタッフができる範囲・分かる範囲で学習支援を行うことで、間接的ではあるが貧困への支援につながると考える。(3年生、女性)

2. 児童クラブとコミュニティの相互補完

ボランティアをさせていただいた玉造キッズでは、一クラスの児童数が約70名と、当該地区の児童年齢の子どもの数に対して、利用者とは比較的小人数であると思われる。背景として、地縁・血縁が

濃い傾向にあり、コミュニティで子どもの面倒を見ることができると等、地域社会が持続可能であると考えられる。児童クラブに登録はしつつも緊急性の高い場合(冠婚葬祭等)に臨時的に利用している利用者もいる。祖父母の存在も重要で、子どもの送迎にご両親が仕事等で困難な場合に、代わりに担当しているケースが散見された。

行方市の子どもの福祉において、児童クラブはコミュニティと補完関係にあり「いざ」というときに頼りになる重要な存在である。今回の調査ではわからなかったが「誰一人取り残さない」観点から、ひとり親世帯の子育て支援における児童クラブの役割は重要であろう。ひとり親世帯は、地縁・血縁からも孤立しがちであり、もっとも支援が必要な人々であると考えられる。(3年生、男性)

3. 児童クラブの高まるニーズと人手不足

児童クラブは「子どもを預かり、遊びを通して子どもの健全な育成に寄与する」という目的に鑑み、開所時間を延ばす等保護者からのニーズに応じてきた。その一方で

人手不足が深刻化し、働き手の獲得が大きな課題となっている。その理由として、市のこども福祉課によれば「仕事が大変」「賃金が安い」等があるとされる。

子どもは社会の宝であり、将来世代の地域の持続可能な開発の担い手として極めて重要な存在である。子どもの福祉にかかる人材確保は行政の最優先事項であろう。他方、行政の財政状況が逼迫する中で、高まるニーズと人材不足という相反する課題にどのように取り組んでいくか。IT等も活用した革新的なアプローチを模索することが重要ではないか。(3年生、男性)



▶児童と遊びながらフィールド調査を行う茨城大学学生(玉造キッズにて、筆者撮影)